



# Forum Forum

## 季刊フォーラムフォーラム

東京国際フォーラム広報誌  
1997 VOLUME 2



展示ホールでは、吹き抜けの空間を生かしてさまざまな企画展が行われている。  
(撮影 / クラッカースタジオ)

---

[フォーラム対談 CROSS REVIEW 第1回](#)

[フォーラム・アート&コラム](#)

---

TOP 



ゲスト：萩元晴彦

誕生したばかりの「東京国際フォーラム」は今後、  
どんな顔をもつようになるのだろうか。

可能性は多彩である。

さまざまなホールを利用し、見てきた劇作家・演出家の

如月小春さんにホスト役をお願いし、

各分野の著名人と共に、夢や注文を語っていただきたい。

第1回のゲストは萩元晴彦さん。

同氏もテレビマンとして、かつ音楽プロデューサーとして


ホールに強い関心をもっている。



ホールA

21世紀の文化の発信基地へ、着実に成長してほしい。

### 多目的ホールの本番開始

 如月 各ホールなど施設の主要部分を見学させて  
いただきましたが、萩元さんはどんな感想をもたれましたか。



萩元 僕は音楽に長く関わっているので、実際にどんな音を聴けるのかに興味をもちましたね。これから何回も通うことになるでしょうけど、期待しています。

またホールごとに特徴がありますし、大ホールなのに客席と舞台が近い。役者や音楽家と観客が空間を共有できるように思いました。如月さんこそ、演出家として初めてのホールを見て血が騒いだんじゃないですか(笑)。

 わくわくしました。でも、期待どおりでした

ね。特にホールCに舞台裏から入って客席全体を眺めた時、温度や湿度も含めて空気になじめました。母体の中に包まれているような居心地の良さを感じましたね。

萩元さんがおっしゃる音に関してですが、たしかに残響がなくてもダメだし、多すぎてもダメ。練習している方々がいたので遠慮したんですけど、本当は自分で発声して試したかったです(笑)。

でも音楽公演を聴かれた方によると、非常にいい音だそうです。



「観客にもプレーヤーにも愛される、幸せなホールになってほしい」

如月小春氏(きさらぎこはる)

劇作家・演出家・劇団「NOISE」代表。1956年生まれ、東京都出身。

各地の演劇ワークショップへの参加、執筆、講演などと多忙である。



「施設全体を連動させるイベントをプロデュースできれば面白い」

萩元晴彦氏（はぎもと はるひこ）

「テレビマンユニオン」代表。1930年生まれ、長野県出身。ホールのプロデュースなど音楽に造詣が深いほか、「長野五輪」シニアプロデューサー就任。



わくわくしました。でも、期待どおりでしたね。特にホールCに舞台裏から入って客席全体を眺めた時、温度や湿度も含めて空気になじめました。母体の中に包まれているような居心地の良さを感じましたね。

萩元さんがおっしゃる音に関してですが、たしかに残響がなくてもダメだし、多すぎてもダメ。練習している方々がいたので遠慮したんですけど、本当は自分で発声して試したかったです（笑）。

でも音楽公演を聴かれた方によると、非常にいい音だそうです。



先端テクノロジーも導入されているそうだし、ハード的には十分だと思いましたね。

また今までは、音楽は音楽専用ホールで、芝居はやはり専用ホールで公演することが常識でした。ここの各ホールはエキシビジョンも含めて多目的に活用できるそうですね。それが可能なら画期的なことです。



でも、まだ稼働し始めたばかり。どんなホールでもそうですが、催しを重ねていくうちに、改良点が出てくるでしょうね。なにしろ、本番は違いますから。私の経験上の実感です（笑）。



どんなホールも、と言えば、どのホールの運営者も自分たちのホールが最高だと思いがちです。でも、安住しちゃいけない。たとえばいい音で聴ける環境にするまで、カラヤンの作ったベルリン・フィルのホールは何回も改善していますから。



テクノロジーも文化状況もどんどん変わっています。それに対応して、「東京国際フォーラム」も進化し続けてほしいですね。

## 複合施設の人格を徐々に形成



ただしハードが立派であっても、あるいは黒字経営であっても、それだけでは十分でないと思います。



これから、この複合施設の人格を形成していくことが必要ですね。そのためにはまず、自主企画を次々に打ち出すべきだと思います。では、どんな企画か。簡単に言うと、好きなことをやればいいんですよ（笑）。すると、次第に個性が出てくる。ファンも増える。歴史のある祭りだって、もともとは隙な連中が始めてそれがいつの間にか欠かせない行事になり、その地域の顔になり、集客しているんですから。



もちろん公共的な施設ですから限界はあるでしょうけど、でも「公共ホール＝無色」という認識がこの10年間ほどでかなり変わってきたと感じています。その意味でいいタイミングのスタートでしたね。しかも複合ホールだから、いろいろな試みができる。



ホールA



そうですね。たとえば単にホールAだけを使うのではなく、施設全体を連動させるイベントがあれば面白いですね。同時通訳機能も整備されているんだから、ワールドワイドな催しにも最適ですしね。



5年ほど前、日本で「アジア女性演劇会議」を開催し、私が実行委員長を務めました。その時、会場探しに苦労したことを覚えています。ここがあればよかったのに(笑)。芝居もワークショップも全体会議も、すべてを一カ所で行えますから。



そういった際には、施設をさらに有効活用するために、付随する企画も出てくるでしょうね。もっとも私自身、全体が広大かつ多機能なので、まだ把握しきれいていません。何回か通ってヒントを見し、ダイナミックな企画を提案したいですね。



たとえば、東京で行う「パリ展」などはどうでしょう。パリのアートもファッションも、そして演劇や音楽、そして国際会議やコンベンションなどを複合的に行ったり。この施設をフルに使いきれるような国際色豊かなイベントとか。



それはいいですね。企画コンペをやればいいんですよ。建築設計分野のように。開催期間と提供予算を決めて、「東京国際フォーラムの機能を存分に発揮する総合企画を出してください」とね。それにコンペ自体が“事件”でもあるし、広報にもなる。採用企画も含めて面白い展開になると思う。

## アートとテクノロジーの融合

ホールC



おっしゃるとおりだと思います。たとえば単発の芝居や音楽を楽しむ喜び、コンベンション会場としての便利さを提供することも重要ですが、プラスアルファがほしい。新しい文化の発信基地に成長してもらいたいですね。



そういう意味で、ここができたのは時代の必然だと思うんですよ。芸術にしても、境界が曖昧になっているし、もちろん国際化という意味ではボーダーレスだし。



たとえば演劇の世界でも照明や音響などではコンピュータを活用することが増えていきます。もちろん演劇だけでなく、何かをやろうとしたら、隣接分野とクロスオーバーすることが不可欠になっていると思います。

当然、アートとテクノロジーが一体化したイベントも増えるでしょうね。俳優やダンサー、そしてコンピュータ・エンジニアやテレビマンが出演者やパネリストとして、あるいは観客として交流する。10年もたてば、そんな状況がむしろ主流になる気がします。



そんな時代に、「東京国際フォーラム」が主役になってほしいですね。すぐには無理かもしれないけど、その方向を模索し、少しずつ「ホール的人格」を形成してほしい。

またいまだにアタマが固い人は、多目的ホールはダメだと言っています。そういう人たちの考えを変えてほしい(笑)。



ある企業がアートとサイエンスを融合した“感性科学”という言葉を使っているんですが、そんな発想が徐々に評価され始めています。私自身、その言葉が21世紀の文化の、ある意味でのキーワードかなと思っています。

そして、その文化は、アーティストやエンジニアだけでなく、行政側の方や一般の方も巻き込んだ大きな輪になると思います。その輪が結び合う場にもなってほしいと思いますね。

## 「時間を過ごしたいホール」へ



そのためには、これまで話した大きな方向性とは別に、ここのファンを着実に増やすことが必要ですね。条件的には抜群だと思うんですよ。立地はいいし、書店やレストランなどのテナントも充実しているし、近くには“ちょっと一杯”の店も多い(笑)。



食事を選べること、そしてオイシイってことは大切ですよ(笑)。それに、ここで

なら、単に観劇するだけでなく、自分に合った時の過ごし方ができる気がします。多くの人たちに“行きたくなる場所”だと早く認知してほしいですね。



観客や利用者だけでなく、そんなプレーヤーも増えてほしい。異色作をぜひ「東京国際フォーラム」で発表したいというような。言い換えれば、ここをホームグラウンドにする人や団体が増えてほしい。





私もアート側の人間ですから、コンベンション機能はもちろん、ここで初演される作品が今後10年間でどれほど増えるかを楽しみにしています。




ホールなどを24時間使うことも可能だし、ケータリングサービスも充実している。もっと積極的に広報すればいいのに(笑)。


ガラスホール

 同感です(笑)。そして「ここに来たい」「ここで演じたい」人間や集団を増やしながら、徐々にボーダーレス文化の発信基地になれば。

 当然、そうなるべきだし、そうなってほしいですね。


「“幸せなホール”になってほしい」


 ボーダーレスと言えば、萩元さんご自身、ボーダーレスに活動されていらっしゃるんですよね。


 テレビ制作の仕事と並行して、以前から各種のプロデュースを手がけてきました。今は長野オリンピックに関係しています。プロデューサーチームの合い言葉は、“少年の心をもった60歳代”です(笑)。




 そのココロは？


 オリンピックがビジネス化していますが、スポーツの原点に戻ろうということです。たとえば開会式を短時間にし、それをすでに事前発表しました。選手にも観客にも負担をかけないためです。そのほか、アトランタオリンピックなどとは違った企画を考えています。

 プロデューサーが権限をもっているわけですね。そのあたりに関連して、「東京国際フォーラム」に対するサジェスションはございますか。


 たとえば先ほどの企画コンペがかりに実現した場合、プロデューサーにすべてを任せることです。小ホールの場合であっても、チケット予約の電話受付から始まり、さまざまな運營業務があります。それらは別個のことではありません。すべてが有機的にかみあっています。全体をコーディネートすることが必要なのです。それが、私が幾つかのプロデューサー経験を経ての結論です。




 任す側と任される側の信頼関係が必要なですね。そのあたりの認識も、時代風潮的に変わってきていると思います。その意味でも、いい時期のスタートですね。


 できれば、広報活動をもっと積極的にやってほしい。難しい面はあると思いますが。

昔は、何をやるかを決めてからホールなりを建設していました。でも、これからは違う。まず、このような受け皿を用意して、アートやイベントを活性化させるべきなのです。そういう初めての大規模施設だから、当初から広報基本方針を打ち出すことは大変でしょうけど。

 私は色々なホールを見てきましたが、幸せなホールってのがあるんですね。観客にもプレーヤーにも愛される。そんな幸せなホールになってほしいし、可能だと思います。そして長期的には、新しい文化や情報の発信基地になる。

 注目し続けていきたいですね。

 本日はありがとうございました。勉強になりました。

 こちらこそ、ありがとうございました。

---

TOP 

## Forum Art

### 誘引力のある石

東京国際フォーラムのアート・コレクションでは、フォーラムのガラスホールを大きな舟に見立ててイメージされた「多様性の舟」というテーマのもとに、国内外50作家による134点の作品が収集・設置されています。

第1回はまず、プラザ北側の「意心帰(いしんき)」をご紹介します。

作者の安田侃は、北海道に生まれ、1970年にイタリアに渡り、以来日本とイタリアの二つの文化圏を背景に制作を続ける彫刻家です。「意心帰(いしんき)」は、その昔ミケランジェロも制作をしたという北イタリアの大理石の産地ピエトラサンタで1991年に創られ、その後安田侃の巡回展とともに、ミラノの歴史的な街並みやイギリスの自然の中にあるヨークシャー彫刻公園、そして故郷のピエトラサンタでさまざまな人に触れ、海を渡って東京に根をおろしました。

この白い不思議な形は、見る角度によって形態の印象がまったく異なるだけでなく、太陽の光や夜間のガラスホールからのライト、強い日差しや曇り空、初夏から秋にかけてのケヤキの緑や雨に濡れた床石との対照などによって、さまざまな色彩や表情を見せてくれます。

その表情の多様さは、大理石の山の一部であった遙か昔からの時間、安田侃の制作のもとになっている体験や思考、そして彫刻として新たな生を享けた後に触れてきた各地の風景や人びとの記憶を、内に秘めているからなのでしょうか。

東京国際フォーラム アートワーク  
 ワーキンググループ 片岡 真美



安田侃「意心帰」  
 カッラーラ産白大理石  
 155.0 × 340.0 × 240.0cm, 1991

Photo:SATO Sadamu & MISAWA Toru

[東京国際フォーラムアートワークのご案内へ](#)

## Forum Column



## 開館記念事業・東京ときめきフェスタより

### アジアがひとつに、アジア・フィル誕生



チョン・ミュンフン音楽監督・指揮  
アジア・フィルハーモニー管弦楽団 旗揚げ公演

東京国際フォーラムで新しいオーケストラが誕生しました。その名は「アジア・フィルハーモニー管弦楽団」。韓国生まれの世界的な指揮者チョン・ミュンフンを音楽監督・指揮者に迎え、アジア8カ国のトップ奏者で構成されています。

1月24日～26日に行われた旗揚げ公演は、壁面にバイオリンをイメージした花梨材をふんだんに使ったシックなホールCに、「ひとつのアジア」の響きをつくりあげました。数度のカーテンコール。そのたびにミュンフンは満場の拍手を、そっくり各パートのメンバーに受け渡したのです。

彼はふたつの理由から音楽監督を引き受けたと言います。ひとつは新しいホールへの興味という音楽的理由、そしてもうひとつは人間的な交流への強い関心。音楽が国境を越えてひとつになれることを証明するものです。

それは「素晴らしい経験」だと彼は言います。アジアフィルは今後、年1回メンバーが集まり、アジア各国を公演する計画です。

## 東京ときめきフェスタ、担当者からのメッセージ

### 人々が集まる広場としての価値を

佐藤通夫 財団法人東京国際交流財団  
総務部 国際交流課 企画事業担当係長

「東京ときめきフェスタ」(1月10日～3月29日)の企画段階ではコンセプトづくりが大変でした。まず、長期にわたること。開館記念事業だけに華やかな祝祭性が必要。一方で従来にない創造性を打ち出すなど、数多くの要素をバランスよく実現しなければならないからです。ホールや会議室がいくつもある巨大な施設なので、搬出入車両や荷捌(くにさばき)場の調整、出演者や来館者のスムーズな入退場も、心配の種でした。皆さんに「素晴らしいホール」と喜んでいただけるよう、これからも円滑な運営に努めます。

## フォーラム施設案内 フォーラムアートショップ

### 開かれた、アートショップ

Bブロック1Fにある、フォーラムアートショップでは、世界のミュージアムグッズや、フォーラムオリジナルグッズ(約20種)を販売しています。

作家の作品発表やアート情報を提供するギャラリーも併設した日本で初めての大衆的なミュージアム複合ショップです。日本的要素を持った現代アートの企画展をこれからも開催していきます。

営業時間：10:00～20:00 年中無休 TEL 03-3286-6716



充実のオリジナルグッズ

来場者からの声 ボブ・ディラン公演(2/10ホールA)より

ディランの渋い声が、ホール全体を圧倒した



- 「1階の最後列でもものすごく臨場感があった」(男37歳)
- 「2階でも音響の返りがとても良かった」(男32歳、女30歳)
- 「アコースティックなギターソロの響きが最高」(男27歳)
- 「シートがひろくゆったり座れた」(女35歳)
- 「2階からでもあまりステージが遠く感じなかった」(男42歳)

